

修学旅行がありました

6年生は、5月13, 14, 15日の3日間、2泊3日の修学旅行に行ってきました。6年生53名が参加して楽しく充実した3日間を過ごすことが出来ました。(残念ながら1名は母国に帰国の為、参加できませんでした。)

3日間とも天候に恵まれ、参加した子ども達に大きな事故もなく、道路渋滞に巻き込まれることもなく予定していた活動を計画通り実施することが出来ました。修学旅行の帰りのバスの中でガイドさんが子どもたちに尋ねました。

「みんなは3日間もお家(うち)を離れていたけど、はやく家に帰りたいのかな。」
子ども達の答えは、「もっと旅行をしたい。」というものでした。

修学旅行という日常生活から離れた体験が、気持ちをわくわくさせ、気分を高揚させます。子どもたちにとってこの3日間は夢のような楽しい一時だったことでしょう。

不思議なことに活動の真っ只中では短く感じられる時間が、過ぎ去って振り返ると、圧倒的な量で思い起こされるものです。活動の最中(さいちゅう)は時間が濃縮されているため短く感じられるのですが、過ぎ去ると濃縮された時間が広がるので圧倒的に大きな思い出となるのだそうです。「聞いたことは忘れ、見たことは覚え、体験したことは一生の思い出になる」のことば通り、子どもたちにとっては一生の思い出、という宝物になった3日間でした。

子ども達の喜びとは裏腹に、3日間、大切なお子さんを預かった先生方は、「くたびれた。明日の土日はゆっくり休もう。」と、いうのが本音かと思います。付き添いの私でも疲れましたから担任の先生方の心労はさぞかしだったと思います。でも、子ども達にとって思い出一杯の修学旅行になったことがなりより嬉しいことです。修学旅行という体験を通し、子ども達が一段と成長したように感じました。

※ 修学旅行豆知識

- 江ノ島、鎌倉のある神奈川の子供達の子供達の修学旅行先はどこだと思いますか。私は若い頃、神奈川県藤沢市の小学校に勤務していました。当時は、修学旅行で日光に行っていました。今も同じ日光(東照宮、華厳の滝、戦場ヶ原等)という話です。
- 今年の修学旅行ではディズニーランドに行きませんでした。甲斐市内の学校でも今年からディズニーランドを取りやめる学校が何校かあったと聞いています。新型インフルエンザの流行ということでなく、学習の場として「ふさわしい場所か」という点から見直しがされているという話です。

鎌倉大仏の前で



海岸で波とたわむれるようす



ハンディを生かす

毎週火曜日に NHK テレビで放映される「プロフェッショナル仕事の流儀 負けるなニッポン」をご覧になっている方は多いかと思えます。1月の頃でしょうか、金属をへらで引き延ばす「へら絞り職人」松井三都男さん(61歳)を取り上げていました。松井さんは四国の高知県の出身です。中学校を卒業し高校受験に失敗し夜間の定時制高校に通っていましたが、そこでも勉強についていけず、「どうせ俺はおちこぼれだ。」と家でぶらぶらしていました。そんな時、東京の町工場(まちこうば)で働く先輩から声がかかりました。

先輩を頼って東京に出て町工場で働き始めました。働き初めてしばらくしてのことです。松井さんを不幸が襲いました。仕事中に機械に指を挟まれ左手の指3本を失ってしまったのです。松井さん18歳の時のことです。会社の車で病院に行くとき、車が踏切で止まりました。その時、一瞬、「このまま車が電車に突っ込んでしまえば楽になれるのにな。」と思ったそうです。

指を失いもう工場で働けない、とっていた松井さんに社長が声をかけてくれました。「おまえはここに居ていいんだよ。」そのことばで、松井さんは「俺はここで生きていこう。」「この恩は仕事で返そう。」と思ったそうです。しかし、左手の指3本を失った松井さんにとって仕事は楽なものではありませんでした。工場の仲間はとても親切でしたが金物工場での仕事は力仕事です。松井さんは左手に力が入らないためどうしても他の人と同じように作業が出来ません。せめて人並みの仕事出来るようになりたい、松井さんは考えました。「身体にハンディのある非力な自分でも力自慢に負けないだけの仕事をするにはどうしたらよいのだろう。」試行錯誤を繰り返し考えた末、力の不足を技で補う独自の方法をあみ出しました。10年が過ぎ、20年が過ぎ、いつしか松井さんは日本屈指のへら絞り職人になっていました。大型旅客機、半導体、H2型ロケット、全て松井さんの技術が関わっています。

60歳を過ぎた今、自分が会得した技を後進に伝えたい、そんなことも考えているそうです。後進を育てるコツを次のように話していました。

※仕事の途中では指示を与えない。失敗しても良いから最後までやらせる。本人が自分で納得して自らの技の未熟さに気づくことが大切だ。

「教える」という仕事に携わる私たち教師にも大変参考になることばです。また、私がこのテレビを見ながら思ったことは、人生の不思議です。もし、松井さんが怪我をしなかったら、これ程の技を身につけることが出来たでしょうか。むしろ、ある程度仕事の要領を覚えたら、もっと給料の良い別の工場(こうば)へ移っていたかもしれません。そして、そこそこの仕事で満足し、更に技を磨こう、などとは思わなかったことでしょうか。左指を失う、という不幸が逆に松井さんを1つの仕事に執着させ、その道を究めさせ、他の誰もがまねの出来ない職人技を身につけさせました。このように考えると、人がその道の達人になるのは、案外、恵まれた条件下ではなく、逆境に置かれた場合のことが多いようです。

思い起こせば、不世出の大横綱といわれた千代の富士は、小さい身体で脱臼(だっきゅう)しやすい肩の持ち主でした。周りからは、「せいぜい十両止まり」と言われていました。それが猛稽古により人一倍の筋肉をつけ、脱臼しやすい肩を守るため上手(うわて)でなく下手(したて)を取る相撲を身につけました。そして遂に横綱まで上り詰めました。このことは私たちにハンディが逆にその人を大成させる不思議さを教えてくれます。今の日本、明るい話題は少ないですが、こんな時代だからこそ、明日を信じ、希望を持ち歩き続けることが大切なのかもしれません。明るい未来を信じて。